東方現想境～Fantasy Wind.

普通の素人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方現想境～Ｆａｎｔａｓｙ　Ｗｉｎｄ．

【Ｎコード】
Ｎ６２７９Ｗ

【作者名】
普通の素人

【あらすじ】
普段はあまり干渉し合わない、「幻想郷」と「外の世界」。
精々、「外の世界」で忘れられた物が「幻想郷」に来たり、外から人が連れて来られる事が稀にあるくらいだった。
だがある日、「幻想郷」から「外の世界」に来た少女達。
彼女達は、「外の世界」でどう過ごすのか…

注意！！

駄文、ぐだぐだ、描写少なめで会話中心です。

これらが駄目だと言う人は、速やかに他の小説を探したり、自分の趣味に入り浸るなど、この小説から離れる事をお勧めします。

また、投稿済みの文を編集する事があるかもしれませんが、話の内容は（多分）変わりません。

Ｓｔａｇｅ１－１　物語の始まり（前書き）

さぁ始まりました、『東方現想夢』

（注意）

作者は文才無し、おまけに初めての投稿です。
話がおかしい、誤字脱字がある、文章が下手だ、読みづらい、など思われるかもしれませんが、出来るだけ皆さんの意見を基に改善していきたいと考えているので、「ここはこうしたらいいのでは」などの感想があれば、出来るだけ書き込みお願いします。

Stage1－1　物語の始まり

「一体、何がどうなっているんですか…？ここは、どこなんですか！？」

……はぁ？

一体、何がどうなっているんですか？
…って、こっちが聞きたい。
一体、どうなってんだ！？

「ちょ、ちょっと待ってくれ！
今、君、どっから…」

…あれ、もしかして…
これ、夢か…？

ほっぺをつねってみる。
痛い。夢じゃない…ってことは…？

「聞いてください！」
「ちょっと待ってくれって…」
「だから聞いてください！！」

考えるより、話を聞いた方が良さそうだな…
この女の子、こっちの言葉聞こえてるのか？

「……」
「……」
「ああ、話は聞くから、とりあえず落ちついて話してくれ」「え、えっと、私は、気が、ついたら」「お、落ち着け、落ち着けって」
「こ、こここに、いて、ですにぇ」

……
どうしよう。
やっぱりこっちの話聞いてない。
……
「い、い、いったい、何が、お、起こったんですうわっ！？」

とりあえず、頭を軽く叩いてやった。
軽くやったから、痛くはないはずなんだが…

「とにかく、落ち着け！」

ビクッ！！

あ……
怒鳴ったのはまずかったか…？
なんか、泣きそうになってるぞ…

「あ、あの、ごめん。
いきなり…あの…怒鳴ったりして」

「いえ、大丈夫です。
おかげで落ち着きました。」

「ほんとにごめん。」
少し涙声になってる…
本当に悪い事したな…。

「いいですよ。気にしないでください。元はと言えば、私が慌ててたのが悪いんです。…怒鳴ってでもくれないと、あのままだったかもしれないですしね。」
「あ、うん…」
「それで、私の事なんですが…何から説明したらいいか…」
「まずは、なんでそんなに慌ててたのか話してくれないか？」
「はい…。
私、神社で昼寝してたんです。
そうしたら、落とされたような感じがして、起きたらここに…」

え？
昼寝？
「今は、真夜中なんだが…
半日も寝ていたってことか？」

「いえ、多分違うと…絶対とは言えないんですが…」
「…昼寝で半日は寝ないか。」
「…落ち着いて考えたら、こんなことするのは……そうか、あのスキマ妖怪しか…それしか考えられない！」

「ん、あれ、なんで勝手に納得…」

ん？
んん？

何か重要な言葉があった気が…

あ。

「いや、ちょっと待って。

『妖怪』って言わなかった？」

「あ……もしかして……今いるのって……まさか……」

女の子の顔がみるみる青くなっていく。

聞くのはまずかったかな…？

「あ、あの、妖怪って言うのは例えであって、本当は、ですね」

ブォン！

「いいわよ、ばらしても構わないわ」

「「うわっ！？」」

な、なんだ！？

いきなり人が！？

「あ、あなたは…？」

「話をする前に、場所を変えましょうか。外では誰に聞かれるかわからないでしょうしね。」

…何言ってんのこの人？？？というか誰？

「えーっと……あなた誰？」

「聞こえなかったの？場所を移すわよ」

「歩きながらでも話してくれないのか？」

「歩く？めんどくさい。なんでわざわざ歩かなきゃいけないのよ。

じゃあ、行くわよ〜」
え？行く？どこに？
というか、どうやって？
ブォン！！
「ぬわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
いきなり、落とされた。

……
う…
ここは…？
俺の、アパート…？
なんで、ここに…？

「う……ん……あれ…ここは…？」
さっき一緒に落とされた女の子…一緒に来たのか…。
まあ、そんなことより…
「あー、ちょっと……頭、どけてもらえないかな…」
俺の腹の上に、頭が乗ってる。落っこちた衝撃だろうか、かなり痛い。
「……あわっ、す、すいません！大丈夫ですか！？」

「なんとかな…」

ブォン！

「やっほー、『お楽しみイベント』はどうだったかしら？」

「お楽しみイベント？おいまさかこれって」

考えるまでもない。
こいつの仕業だろう。
なら、やることは一つだな…。

床に置いてあった『リモコン』を手に取る。

「さて、この『リモコン』もちろんテレビを操作するものですが、
ここで問題。他にはどんな使い方があるでしょう？」

さて、大きく振りかぶって…

「わーっ！！待って待って！！待って下さい！！！」

チッ…

「悪かったわ、本当に」
「反省してるのかこの馬鹿」

「ゆ、許してあげましょうよぉ…」

……

もういいか。まだイラつくけど。

「仕方ないな。それで、色々と聞きたい事があるんだが」
「許してくれるの？」
「はいはい、許す許す」
「なんか適当ねぇ～」
「別に、許さなくても良いんだけどなぁ…」

さて、またまた振りかぶって……

「ごめんなさい」
「よろしい」

「あの～、2人とも、そろそろ本題に…」

「そうね。まずは、自己紹介といきましょう。
名前がわからないと、何かと面倒でしょう？
と言っても、私は名前を知っているのだけれど」

「なんで知ってんの……
まあいいか、俺は『緑山風戸（みどりやまかざと）』だ、風戸でいい」

「風戸さんですか、いい名前ですね」
「そうか？」
「私もいい名前だと思うわよ。ちなみに私は『八雲紫（やくもゆかり）』よ。」

「最後は私ですね！
私は『東風谷早苗（こちやさなえ）』です！

風戸さん、初めまして！」

「八雲さんに、東風谷さんか」

「紫でいいわよ」

「早苗でいいです」

「じゃあ、紫さんに、早苗さんか」

でも…

東風谷早苗…？八雲紫…？

どっかで、聞いたことがあるような…？

Ｓｔａｇｅ１－１　物語の始まり（後書き）

作者のダメダメっぷりが色々でていると思われます。
アドバイスがある読者様は、出来れば伝えてくれるとありがたいです。
では、次の話へ…

Ｓｔａｇｅ１－２　狂気の早苗さん

東風谷早苗に、八雲紫…
やっぱりどこかで…

「そろそろ、種明かしをしようかしらね」

え？種明かし？

「風戸くん、君、実は…」

え？
なにこの怪しい雰囲気、もしかして俺には特別な力が…とか、そんな感じのやつか？

「私達の事、すでに知っているのよ」

「なるほどー。別にたいした事ないじゃないか……って、え？
俺達って初対面ですよね？」

「あなた、ノリツッコミの才能あるわね…じゃなかった、説明するのは面倒ね。こうしましょう」

そう言うと、紫さんが俺の額に手を当てた。

「どう？思い出した？」
「ええ」
「あら？随分と落ち着いてるじゃない。さっきまで事あるごとに騒

いでたのに」「ええ、だってこれ夢でしょ。
夢で騒いでもどうにもならないでしょ」
さっきほっぺをつねってみたが、まあ、それだけリアルな夢だと言うことだろう。

「残念だけど、これは夢じゃないわよ。紛れもない現実よ」
「早苗さーん、俺のほっぺたつねってみてくださーい。それで痛かったら認めまーす」
うん、これは夢だ。
早苗さんが俺のほっぺたつねっても痛くないはずなんだ。
「えーっと…正直意味がわからないんですけど、風戸さんのほっぺたをつねればいいんですよね？いきますよ？」
「ああ、いふぁいいふぁい」
どうやら、夢ではないらしい。
多分。
「もおひひよー（もういいよー）」
「……」
あれ？
「風戸さんのほっぺた、柔らかいなぁ……」

…はい！？

「どこまで伸びるのかなぁ～」

ちょっと！まただよ！早苗さんまた話聞いてないよ！
痛い！痛いって！どこまで伸ばす気なのこの人！？
ちょ、両手で伸ばさないで……洒落になんない…

そうだ紫さん！助けて下さいお願いします！

ゆかり　は　ニヤニヤしながら　こちらを　みている！

かざと　は　６００の　せいしんてき　ダメージ　を　うけた！！

……誰か…

……た……す……け…て……くれ…

「伸びろ伸びろぉ～

……

……

ハッ！！？私は何を！？」

た……

たす……かった…のか…？

あぁ…助かったんだ。

もう…ゴールしても…

「か、風戸さん？風戸さん！？
紫さん！いったい誰がこんな事したんですか！？」

「覚えてないの！？」

「う…うーん……」
「風戸さん、ごめんなさい！！」

何かいきなり謝られた。
何で謝られたんだ？うーん…。ああ、そっかそういう事か。

「あ、えっと、……いや、気にしなくて良いって。もう痛まないし」
「ごめんなさい、本当に…」
「いいって。ほら……なんか、おかしくなってたんじゃないかな、二人とも」
「二人ともって？どういうことですか？」

……なんて言えば良いんだ…うーん…

「俺、何か途中から、このままでもいいか…なんてことも考えてたんだよなぁ」

あれ？
俺何言ってんの！？
「えっと、それってどういう…」
「はいはーい、話が脱線してるわよ～。ほら二人とも、本題に入るわよ～」
「あ、はい、そうですよね。まずは色々説明しなくちゃ、ですよね」
「いや、説明はいらないんだけど……」
「ああもう、あなた達に任せてたら面倒だわ、私が説明するわよ」
確かに面倒だよなぁ。
早苗さん、話聞かないからなぁ…。
「いや、ここは私が」「紫さん、説明どうぞー」
危ない危ない…
早苗さん、頼むからちょっと静かにしてくれ…
「じゃあ説明するわね。まず風戸くん、あなたの事だけれど」
「無視！？無視なんですか！？」
そうか無視か、その手があったか…
「あなたは、元々私達の事を知っていたのよね？」
「ええ、まあ…と言っても、まさかこうして目の前にいるってのは

ちょっと信じられないかな」
「まあ、仕方ないわよね」
「そうですね。まあ、悪い気はしないなぁ…」
「あら、嬉しそうねぇ」
「そうかな？」
「そう見えるわよぉ～」
「そっかぁ～
あれ、そう言えば、
早苗さんは？」

そういえば、さっきから何も喋っていない。

「ああ、あの子ならほら、そこに居るわよ」
「……あー……」
早苗さん、なんか沈んでる…でも、正直自業自得な気がするからな…

（ちょっとちょっと、いいお知らせよ）

紫さん、早苗さんに何か話してるけど、何を言ってるんだ？

（風戸くん、ほっぺたやってもいいって言ってるわよ。お詫びのつもりみたいね。）

「えっ！？ほ、本当に良いんですか、風戸さん！？」

何が！？

紫さん、一体何を言ったんだ…まあいいか、適当に答えときゃ大丈夫だろ。

「あ…ああ、良いぞ。」
「本当ですか！？じゃあ早速…」
あれ、もしかして…
「今度は優しく伸ばしますよ～」
あ、やっちゃったな……
「ほらー、伸びろ伸びろ～」
「もっと伸びろぉ～」
「ぷにぷにぃ～」
「むぎゅー」
ああ、何か気持ちよくなってきた……
何かやらなきゃいけない事があった気もするけど…早苗さん止まんないだろうし、どうでもいいよな…
「むぎゅむぎゅー」
「止まるのかしら、これ？まだ随分説明あるのに」

Ｓｔａｇｅ１－２　狂気の早苗さん（後書き）

ぐだぐだです。
話も全然進んでいません。
早苗さんも大変な事になっています。

Ｓｔａｇｅ１－３　予想外の奇跡

「むぎゅー」

「ぎゅー」

「ぷにぃー」

「あら、まだやってる。もう１０分経つわよ…もういいわよね、早苗ー、時間よー」

さすがに待っていられなかったのか、紫が早苗の肩を叩く。

「伸びろ～……

えっ？もう終わりなんですか？もうちょっとだけ～」

「もう１０分経つわよ。もう止めときなさい」

「あ、もうそんなに…」

「さて、風戸くんを起こしてやりなさいな。まだ話す事もあるしね」

「あ、はい」

「そうねぇ、普通に起こすのも面白くないし……

キスでもしてみたら？」

「キ、キス！！？？風戸さんに！？何でですか！？」「あらあら、

そんなに顔を真っ赤にしちゃって。ちょっとからかっただけなのにねぇ」
「からかわないで下さい！」

「う……」
「あっ…
風戸さん、起きちゃいましたか…。」
早苗さん、さっき何か言ってなかったか？何か言ってた気がするんだけどな…気のせいか。

「ほら、今度こそ本題に戻るわよ」
「「はーい……」」
これ以上無駄話はしたくないと思ったが、早苗さんもどうやら同じのようだ。
まあ、早苗さんも疲れたんだろう。

「じゃあ話すわ、早苗もよく聞いてね。
風戸くんは、私達の事を知っているのよ。幻想郷の有名人や、起きた異変なんかも大抵は知っているの。」
「ええっ！？何でなんですか！？」

少年説明中……

「えっと、つまり…幻想郷での物語が、こちらでは空想の物語として知られている…って事ですか！？」

「まあ、そう言う事だ。」

「あれ？じゃあなんでさっきまで忘れてたんですか？」

「ああ、それは私がやったのよ。そっちの方が面白そうだったから」

やっぱりか。

理由まで含めて予想通りだ。

「そしてもう一つ。私達がここに来た理由だけど、簡単に言えば、こっちの世界の調査よ。」

「「調査？」」

調査なら、自分で行けばいいんじゃないか？

「幻想郷を知っている人がこっちにたくさん居るのに、幻想郷でこっちの世界を知っているのが私くらいなんて、不平等じゃない。だから調査隊を連れてきて暇つ…調査するのよ」

「何か今さらっと本音が見えた気が…」

「気のせいよ」

何か睨まれた。

「だから、早苗にはここに住んでもらって、こっちの世界について

調べてもらうのよ。後で新聞に感想文でも書いてもらうわ」

「新聞に感想文って…何かもうちょっと重要な事調べるとかじゃないんですか？」

しょぼいな、おい。

思ったが口には出さなかった。

「風戸くん、あなた、わざとスルーしてるのよね？そうなのよね？」

「え？何が？」

「はぁ…もう一度言うわよ。

『早苗にはここに住んでもらって、こっちの世界について調べてもらうのよ』」

え？

ええ？

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？」

「早苗、構わないわよね？」

「ええ、まあ…泊まる家がある訳でも無いですし、風戸さんなら大丈夫ですよ。風戸さん、優しいですもん。」

「えぇぇぇぇぇぇ！！？」

早苗さん！？
なんで普通に男の人の家に泊まろうとしてんの！？

「それじゃあ、1か月くらいこっちで暮らしてもらうわ。
言い忘れていたけど、幻想郷のみんなには伝えてあるから、心配はしなくていいわよ。じゃあ、またね～」

え！？
家主の許可は取らないのか！？っていうか行っちゃったし！

「風戸さん、短い間ですがこれからよろしくお願いします。」
俺だけか！？この状況がおかしいと思ってるのは俺だけなのか！？

「あの、早苗さん、俺まだ許可してないんだけど…」

「えっ！？だ、だめなんですか…？」

「あ、ああわかった。わかったよ…別に、断る理由も無いしな…」
涙目で頼まれたら断れないなんて思ってない。思ってないったら思ってない。

「な、なんだ、ビックリさせないで下さいよぉ～

もしかしたら断られるかもしれない、なんて思ったんですよぉ～」

「あはは…そりゃ悪かった」

「それじゃ改めて、
よろしくお願いします！」

まあ、退屈な生活よりは、こういう楽しい事があった方がいいよな…

「風戸さん！」
「ん？なんだ？」
「ほっぺた「駄目だ」伸ばさせ…って、断るの早過ぎですよ！せめてもう一回だけ…」
「無理だ、これ以上やられるとやばい…」

色々な意味で。

「むーっ…
さっきは、『もっとやってほしい』みたいな事言ってませんでしたか？」

「あれは、おかしくなってたって言ったろ」

「むむーっ…
こうなったら、強引にでも…」「追い出されてもいいなら、やれば良いと思う」

「…だめ…なんですか？」
…涙目で頼み込みっ！？またかっ！？
何とかして断らなければ…
「わかったよ、でも今日は無理だ」

よし！断れ…
……
……

あれ？あれれ？
これ、断ってないよ？
ただの先送りだよ？何やってんの俺？
「ほ、本当に！？
明日楽しみにしてますよ！」

やってしまったようだ。明日もほっぺた伸ばされる。なんであんなことを……

「ちょ、ちょっとここで待ってろ、水飲んでくる」

「明日もほっぺたをぷにぷにぃ～」

話聞いてねぇ…
まあいいか。

さてと、水飲んで落ち着くか……

あれ？

こんな所に、なんで…

『ダンボール箱』があるんだ？

Ｓｔａｇｅ１－３　予想外の奇跡（後書き）

テンプレ的な展開なんですが、これくらいしか思いつきませんでした…。

上手い文を書ける人との違いは何なんでしょう…

Stage2－1　集合

…ダンボールだ。
ダンボールがある。
まさか、この中に人が入ってる…訳ないか。
ん？何か紙が？
『色々入ってるわよ～
八雲紫より』
「……
開けたくねぇ…」
嫌な予感しかしない…

「うん、無視するか」
「あれ、何かありましたか？」
「ん、早苗さんどうした？」
「私も水飲みに来ました。で、それは…」
「紫さんからだ」

「えっと、これは……
怪しいですね……
とりあえず、あっちの部屋に運んでおきましょうか」
「そうだな」

「どっこらせ、と……
結構重いなこれ…」

「私が手伝うって言ったのに、1人で持つからですよ」
「女の子に荷物持ちやらせる訳にはいかないだろ？
この荷物、結構重いし」

「むーっ…
私だって、もう子供じゃ無いんですから、これくらい楽に持てますよ！それっ！」

「ちょっ！？早苗さん！？待った！」

そのダンボール、結構重いぞ…
持ち上がったことは持ち上がったけど、ふらふら…

「よっと……うわっ！？」
やばっ！！倒れる！？
しかもこっちに！？

「あ、ありがとうございます…」
「まったく…俺の方に倒れてきたから止められたけど…
もう危ない事すんなよ」
結構危なかったな…間違ったら怪我してる所だった…

「子供みたいに…」
「俺が怪我するならまだいいが、
早苗さんが怪我するのは嫌だからな」

「……私も、風戸さんが怪我するのは嫌です…

風戸さん、危ない事してごめんなさい…」

「わかったなら良いんだ、もうしなきゃいい。
まあ、危ない時には助けるけどな」

「な、なら私も同じですよ！
風戸さんが危ない時は、私が助けてあげますよ！」

「頼もしいな、
でも、そんな事が無いのが一番だ、そうだろ？」

「そうですよね、やっぱりそうですよね…。
（でも、助けられてばかりじゃなあ…）」

「ん？何か言った？」

「な、何でもないですよ！」
「本当に？」
「ほ、ほほ本当です！
何も言ってませんって！」…気になるけど、これ以上聞くのは気が引けるな…

「本当ですからね！？
何も言ってないですよ！！」
「あー、はいはい、わかったわかった」

にしても…

「…それにしても、このダンボール箱…
開けるか？」

「いきなりですね…私は、出来れば開けたくないです」

「でも…この中に入ってる物って、もしかしたら、服とかじゃないのか？」
そうじゃなかったら、早苗さんの着替えが無いからな…

「ああ…そうかもしれませんね、でもなんか怖いです、
風戸さん、開けてくれますか？」

「分かっ……じゃなくて、人の話聞いてた！？
服入ってるかもって言ってんじゃん！」

「…え？別に良いじゃないですか」

「良くない良くない！
早苗さんの物っぽいから、自分で開けて！」

「そこまで言うなら…」

…服ならまだいいが…
その他色々な物（具体例は出さないでおこう）
なんてあったら気まずい事この上ない…

「あっ！
着替えとか布団とかありました！」

……
うん、確かに着替えやら布団やら出てくるんだが…
明らかにダンボール箱に入らない量だよねそれ。
まあ、常識に囚われてはいけないよな、うん。

「これだけあれば、お泊まりでも大丈夫そうです！
それと風戸さん、何か怪しい物が…」

……

「なにこれ？すっごく怪しいんだけど」

ダンボール箱の底に、怪しい物が大量に入っている…
怪しいっ！怪しすぎるっ！

「えっと、なになに…
『濃塩酸』に、『濃硫酸』に、『濃硝酸』…」

「おいいいいいいい！？
何でだぁぁぁぁぁ！？
危ないにも程があるぞ！？」

「それと、『八雲紫呼び出しボタン』…？」

「今すぐ呼んで色々説明してもらおうじゃないか。
早苗さん、それ押して」

「あ、はい」

カチッ

ブォン！

「イヤッホー！」

お、紫さん出てきた。
さて、色々質問を…

「丁度良いタイミングで呼んでくれたわね。
こっちも準備が終わったのよ。
まあ大方、私を呼んだって事は、色々質問があるんでしょうけど、
それは後にしておいて」

ちょっ！
質問タイム無しかよ！

「調査隊のメンバーの顔合わせをしましょうか。
ここじゃ狭いし、外行きましょう」

「え？
どういう意味…」

ブォン！

あれ、床が無い…ってまた！？
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！」
「きゃあぁぁぁぁぁぁ！」

また、落とされた。まただ。

ドサッ！

「いってえ…」

ブォン！

ドサッ！

「にぇあ！」

「あいたたた…

って風戸さん、ごめんなさい！

すぐどきますね！」

「大丈夫、早苗さんは悪くないから」

俺の所にピンポイントで早苗さんを落とせる奴など一人しかいない

っ！

「全員揃ったようね。

じゃあ始めるわよ。

最初は、自己紹介からね」

全員揃った？

さっきから一体何の話を…

…

ん？

何か…

人が居るな。
それにここ、さっき早苗さんと会った場所か…

「あら？
人が居るのに気付いてなかったの？
誰かに見とれてたのかしら？」

「あんたが早苗さんを落としたせいだ」

「…風戸さん、私を見てたんですか…？」

「人の話を聞くようにしなさい早苗さん」

早苗さん、頼む！
人の話を聞いてくれ！
頼むから！！

にしても……

「紫さん、ここに居るの、
どっかで見た顔ばっかりなんだけど」

6人居るようだが、
3人が俺の友人、
残り3人もどこかで見たような気がする…

「気を取り直して、自己紹介するわよ〜」
「スルー……だと……」
ひでぇ。
「風戸くん、早苗、ほら自己紹介して」
「……緑山風戸だ、よろしく」
とりあえず自己紹介した。
「東風谷早苗です。初めまして、皆さん」
「ほら、次はあなた達よ」
「僕は、森川速人(もりかわ はやと)です。よろしくお願いします。」
「霧雨魔理沙(きりさめ まりさ)だぜ」
そう言って自己紹介したのは、メガネで長身の男と、いかにも魔女といった格好をした、髪も目も金色の女の子。
「天野流人(あまの りゅうと)だよー。よろしくー」
「あたいは小野塚小町(おのづか こまち)さ。
よろしくな」
今度は、半分寝てるようなぽけーっとした男と、少し変わった喋り

方をする赤髪赤眼の女の子が自己紹介してきた。

「…私は白鳥春海。
よろしく…」

「清く正しい射命丸文です！
皆さん、よろしくお願いしますね！」

最後に、おどおどした感じの長い髪の女の子と、それとは対称的に、明るく髪は黒いショート、そして赤みがかった目の女の子の自己紹介。

そして、いくら考えてもどういう事かわからない、俺。

「さっきもみんなに言ったと思うけど、この8人にはこっちの世界の調査、及び補助をしてもらうわ」

拒否権はあるのか、これ？

「あ、先に言っておくけど、あなた達に拒否権はないわ」

なにっ！

先読みされた！？

「調査と言っても、大した事ではないわ。この世界で過ごして、その４人に感想聞くだけだから」

「つまり僕達に、この４人のこっちの世界での観光を手伝えと言うことですね」

「その通りよ、速人くん。
まあ、後はみんなに説明した通りよ。じゃあね～」

「待ったあぁ！！」

「なに？風戸くん？」

「ダンボール箱に意味不明の薬品が入ってたんだが…
なんだあれ？」

「箱の底に説明書きがあるわ。
じゃあ改めて、さよなら～」

ブォン！

…ん？さよなら…？

「ちょ、紫さん、待った待った！」

「……なに？まだ何かあるの？」

「スキマで家に帰してくれ」

「あら？それが人に物を頼む態度なの？」

「スキマで家に帰して下さいお願いします！」

実を言うと、ここがどこだか俺は正確にはわかっていない。

早苗さんに会った時は、そこらを適当に歩いていただけだしな…

（面倒ねぇ……

あっ！）

「いいわ、みんな送ってあげる」

ブォン！

「あぁぁぁぁぁぁぁ…」

3回目ともなれば、多少は慣れるんだな…

でも、紫さんが笑顔だったな…
何か企んでるのか…？

Ｓｔａｇｅ２－１　集合（後書き）

展開の早さが一定にならない…

なんだかんだでグダグダです。

Stage2－2　会議

「……」

「ご、ごめんなさい！
また風戸さんの所に落ちちゃいました！すいません！」

「……」

返事がない
気絶しているようだ

「あわわっ！？だ、大丈夫ですか！？

……そうだ！ほっぺたを…」

「あいたたた…
あれ？早苗さんどうしたの？」
何か嫌な予感がしたが、気のせいだろう。
起きなきゃ大変な事になる、なんて事はないだろうし。

「ナ、ナンデモナイデスヨー」

「…あ、そう。
にしてもあのスキマ…
今度会ったら仕返ししてやる…
どんな仕返しをしてやろうかなぁ……」

「風戸さん、仕返しも良いですが、さっきの人達、一体誰なんですか？」

「さっきの？
ああ、あの3人はな、俺と同じ学校に通ってる友達だ。
ちなみに、みんなこのアパートに住んでる」

「あ、ここってアパートだったんですか」

…ああ、そうか。
早苗さん、ここにはスキマで来たから、ここがどんな所だかわかってないのか。

「それと、あの人達って、どんな感じの人なんですか？」

「実際に話してみた方が早い。
後説明が面倒くさい。

そんな事より、さっき言ってた説明書きってのを見よう」

「あ、はい。
どこに……
あっ、ありましたよ！」

なになに…

『危険な物質が入っていると言ったな。
あれは嘘だ。』

「……」

『あれはただの水だ。』

「……おい何だこれ」
「意味がわかりませんね…。
でも、これはただの水らしいです。
安全な物みたいですね…」

よくよく確かめて見ると、やっぱりただの水だった。
本当に危険な薬品を送ってきていたら、どうなっていたことやら…
……

「あれ？まだ何かありますよ！」

「まだあんのかよ……」

「えーっと……光学迷彩バッジと……髪を染める薬、だそうです」
「光学迷彩バッジ！？なにそれ！？」
「『服につけて、スイッチオン！
すると、あら不思議！
自分以外に自分の姿が見えなくなります！

開発　河童のみんな

協賛　八雲紫』
だそうです…」

「えー……
なにそれ……」
あの伝説の傭兵もビックリな装備だろこれ。
インチキだろこれ…。

「あと、この薬は……
『すぐに髪の色を変えられます！
元に戻すのも一瞬です！
開発　河童のにとり
　　八雲紫』
って……」
紫さん今回開発に携わってるよ！
あのスキマ万能過ぎるよ！

「……試すのは後にしよう。
その前にやっときたい事がある」

携帯で、あのメンバーに『ここに来てほしい』とメールを送る。

「やっときたい事？何なんですか？」

「みんなで会議する」

「えー、これから、『第一回・幻想郷調査隊、及び補助隊による会議』を始める。メンバーは８人、今回の会議には全員が参加している。今回の会議の目的は、幻想郷から来た調査隊４人の当面の行動目標、
及びその４人のこれからの生活に関する注意事項、
これらについて話し合うこととする。」

「…風戸さん、何で仕切ってるんですか？」
「面白そうだったから」

この喋り方、結構面倒だけど、面白いと思う…

「まあ、その喋り方はアレだけど、
言っている事は的を得ていると思うよ」

「まあな…確かに私もそう思うぜ、なあ、速人？
でも、喋り方はちょっとアレだな」

……
速人、それに魔理沙さん。
『アレ』って……

ああもう、話を進めよう。「それで、行動目標なんだが…
俺は、楽しめればそれでいいと思ってる。見たい物を見て、知りたい事を知って、したい事をする。
それでいいと思うんだが……
みんなはどう思う？」

「あたいはそれでいいと思うよ。
みんな、どう思う？」

「いいと思うぜ」
「いいですねぇ」
「いいと思いますよ、風戸さん」
小町さんの答えに、魔理沙さん、文さん、早苗さんが同意した。

「それじゃ、決まりな。
したい事が有ったら、俺達に頼んでくれ。

……で、これが重要なんだが……
こっちに居る間の注意事項だ」

「注意事項？そんなのがあるのかい？」
小町さんが、不思議な顔でこっちを見た。
「まず、飛ばない事。
後、弾幕、スペルカード……
あと、魔法なんかも使っちゃだめだ」
「あぁ…なるほどねぇ…
こっちではそういう事は有り得ない、って事だね」
「わかってるなら話は早いな。
それともう一つ。
みんなの正体は、なるべく伏せておいてほしい」
「あやや、それはどういう事ですかね？」
今度は文さんが質問してきた。
「詳しい説明は省くけど、みんなはこっちで有名なんだ。
だから、正体がバレたら大騒ぎになると思う。
だから、正体を伏せておいてほしいんだ」
「なるほど…私達が有名人なんですか…」
まあ、さすがに予想外だよな…
「それで、変装するんですか！？
もしかしてサングラス！？」
と思ったら、とんでもない事を聞かれた。

なんか、早苗さんみたいな感じになってきたな…

「違う、サングラスはしない。
その代わりに、髪の色を変える。
後、服もな」

「髪の色を変えるだって？
どういう事だい？」

小町さんに聞かれた。

「早苗さん、さっきの薬出してくれない？」

「あ、わかりました。
はい、これです」

「どうも、早苗さん。

これで髪の色を変える。
まだ試していないけど、大丈夫だと思う……多分」

「なるほど…」

「髪の色を変えてもらうのは、小町さんと…早苗さん。
その赤髪、緑髪は、凄く珍しいから。
あ…もちろん、嫌ならいいんだけど…」

「構わないよ」

「構わないです」

2人はOKをくれた。
なら、これは大丈夫だろう。
薬を試すのは、自分でやるか。
「それじゃあ、服だけど…
みんなの所に、こんな荷物来た？」

そう言って例のダンボール箱を指差すと、

「それなら有ったよ。
中には魔理沙さんの服とか、そんな感じの物が入ってたんだって、
魔理沙さんが言ってた」

速人がそう答えた。

「確かに、あたいもそんなの見たよ」

「…あの……私も…それ、見ました…」

続いて小町さん、そして春海も答えてきた。

「全員の所に来てるみたいだな…
これで服も問題無しだな。
後は…何かあるか？」

……

「よし、どうやら、今のところ問題は無いようだな。
…何かあったら、一人で抱え込まず、相談するようにしてほしい。
それじゃあ、解散しようか…

…一名を除いて。」

「一名？
一体誰ですか、風戸さん？」

早苗さんが部屋を見渡し…

「あっ！？」

気づいたようだ。

「グー…スー…」

「……」

「流人…起きろぉぉ！！」

文字通り、叩き起こした。
「ぐわっ！？
…なにするんだ～」

「寝てたなこの野郎。
まあ、いつもの事だから…

もう一回説明してやる…」

少年説明中……

「なるほど〜」

…疲れた。

「なあ、風戸さんとやら。
流人は…いつもこんなんなのかい？」

「…残念ながら」

「あはは…
こりゃあ、大変になるかもしれないねぇ…」

「はは……
頑張って、小町さん…」

確かに、流人を相手に話すのは大変だからな…
気を抜いたらすぐ寝るし…

まあ、小町さんには頑張ってもらうとして、

今日の所はこれで終わりにするか…

「それじゃあ改めて、解散！
明日から、楽しんで行こう！」

Ｓｔａｇｅ２－２　会議（後書き）

書くのに時間がかかりすぎていると思う今日この頃。

Ｓｔａｇｅ２－３　退屈無き生活

「風戸さん、みんな帰っちゃいましたけど…
伝える事、他に無かったんですか？
あれだけじゃあ、足りないんじゃあ…？」

「大丈夫じゃないか？
何かあったら、俺達に聞けばいい。
早苗さんも、何かあったら俺に言ってくれ。
俺のできる範囲でなら、大抵の事はするよ」

「ありがとうございます。
風戸さんも、悩みは一人で抱え込まないようにして下さいね。
約束ですよ？」

約束、か…
破る訳にはいかないな。

「わかったよ、約束する」

それに、頼れる人が増えるのは、とても嬉しい。

「じゃあ、約束ですからね！

…風戸さん、それじゃあ…」

ん？なんなんだ？

「私の部屋、ありますか…」

…

……

あ。

あああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

その後、何とかして空き部屋をつくり、掃除し、早苗さんの部屋を確保した。

とりあえず、終わったと言っとかないと…

「終わったよー、早苗さ……ん……？」

さっきの部屋に戻ると、
早苗さんの服が変わっていた。
あの、ちょっと不思議な服から、普通の女の子が着る服に。

「あ、ありがとうございました！
私の部屋、本当に用意してくれたんですね！」

「あ、まあ、お客さんの部屋を用意するのは、家主の義務だから、
気にするな。

…にしても、その服は…」

「あ、あのダンボール箱に入っていた服です」

いや、そうじゃない！
そうじゃなくて！

ん？

もしかして…？

「…あ。
お風呂、入っちゃったんですけど……
もしかして、まずかったですか…？」

「あ、それなら全然大丈夫…

……
あれ？え？」
確かに、早苗さんの髪が少し湿っているのが、よく見るとわかった。
それなら、早苗さんの服が着替えられているのも説明がつく。でも…

……
「？
風戸さん、なにか…」
「っ！？
何でもない！！」

何でもないったら何でもない！
俺は何も考えてない…
「…本当ですかぁ？」

そう言って、早苗さんが上目遣いで俺を見て…

落ち着け、落ち着け俺！！
何も考えるな！

「ほ、本当だって！」
「そうですかぁ…」

あ、危なかった…
何か色々と危なかった…

「そ、そんな事より、夕飯はどうする？

まあ、もう夜遅いけど…」
話題をそらす為ではない。
ないと言ったらない。
「…えっと……その…」
…？
何かあるのかな？
「…どうした？」
「ご飯、私が作りますか…？」
何だ、そう言うことか。
「何言ってるんだ、俺が作るさ。
お客さんにご飯作ってもらう訳にはいかないだろ？」
「でも…
私、もうお客さんじゃないですよ。
これからしばらく、ここで暮らすんですから、家事の手伝いくらい…」
「確かに…
まあ、それは明日決めよう。
今日は俺が作るさ。
それで、質問なんだけど…
好きな料理とか、味付けとかある？」
「そうですね、好きな料理ですか……」

少年料理中……

「待たせちゃったな。
簡単な料理くらいしか作れなかったけど、まあ、食べてくれ」

「それじゃあ遠慮なく。
いただきます！」
「それじゃ俺も、いただきます」

「……
風戸さん、これ、美味しいです！とても！」

…良かった。
早苗さんの口に合わなかったら、どうすれば良かったか…

「…やっぱり、自分の料理に『おいしい』って言って貰えると、嬉しいな」

「明日は、私がご飯作りますね！約束ですよ！」

「…ああ、お願いするよ」

どうやら、さっきの俺の呟きは、聞こえていなかったようだ。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさま。
早苗さん、俺お風呂入っちゃうから」

「あ、分かりました」

少年入浴中……

「ふー、さっぱりした」

さて、食器を洗っとかないと…

「…あれ？」

食器が、洗われてる…？

…ああそうか、早苗さんが洗ってくれたのか…。
手間、かけさせちゃったな…

「早苗さーん、ありがとーう…
…あれ、早苗さん？」
いない？
部屋にいるのか？

「早苗さん、居る？」
「あ、はい！
何かありましたか、風戸さん？」
「あ…
食器、洗ってくれて、ありがとな」
「そんな、別にお礼なんていいですよ！
お手伝いするのは当然です！」
「はは…いい人だな、早苗さんは。
俺なんかより、ずっと優しい人だよ」
「風戸さんも優しい人ですよ。
俺なんかより、なんて言わないで下さい」
「……」
やっぱり、こういう事言われると、恥ずかしいな……
「風戸さん？」

「あ、いや…
何でもないよ。

…もう遅いし、そろそろ寝なきゃな」

「それじゃあ、もう寝ますね。
おやすみなさい、風戸さん」

「おやすみなさい、早苗さん」

「さて、寝るか…」

今日は色々あって疲れた…
とっとと寝るか…

「あら、まだ寝ちゃ駄目よ。
あなたにはまだ言わなきゃいけない事があるからね」
「とっとと寝たいから、早めに済ませ……
え？」

あれ？誰かいるのか？
「何？どうかしたの？」
この声は…
……

「さて、寝るか！」
「ええっ！！？無視！？ちょっと！」

「……」

「ひどい…無視だなんて…
ゆかりん、すっごく悲しいわ…」

「……」

「私を無視するなんて…
早苗はやっぱり別の人の所に…」
「無視してすいませんでした紫さん。
話とは何でしょうか？」
そんな事言われたら無視できない…

早苗さんがいなくなったら、退屈な生活が待ってるだけだからな…

「……ちょっと、真面目な話。
早苗の事よ。
彼女は元々こちら側に居た、と言うのは知ってるわね？」

「知ってますが…」

いきなり何の話だ？

「単刀直入に言うわ。
『早苗は、両親に会ってはいけない』と言う事よ」

「…なんで？」

「…あなたは、大事な人がいなくなったら、悲しい？」

「そりゃ、悲しいですよ」

「それじゃあ、いなくなったと思っていた人にまた会えたけど、すぐに会えなくなってしまったら、悲しい？」

「それは……」

…紫さんは、『早苗さんの両親に辛い思いをさせたくない』と言いたいのだろう。
それに、辛い思いをするのは、早苗さんも同じだと。

「それに…
早苗の両親は、もう早苗の事を忘れているのよ…
…私が記憶を封印したの。
記憶を戻すことはできるけど…」

「もし記憶を戻したら、両親はとても悲しむ、と言う事か…」

「…私も、会わせたいのよ。
…でも、仕方ないの」

…結局、早苗さんは、
両親に会えない…

…会わせてあげたい。
……でも、できない。

仕方ない…のか。

「紫さん」

「…なにかしら？」

「早苗さんの両親の記憶を、
こっちにいる間だけ、封印する…
そんな事はできないんですか…？」

…これでいいのか？
…早苗さんに、両親を会わせなくていいのか？

「できるわ。
元々、そうするつもりで来たのよ。
でも、人の記憶を封印するのは、やっぱり…嫌なのよ。
あなたにこうして話しに来たのも、そういう気持ちから逃げたかったから。
それに、これから早苗を任せる人にこの事を言っておかないのは、どうかと思ってね」

やっぱり、会うべきか…？
いや、会わない方が…？

「……もう一度言うけど、
『会わせられない』の。
会わせたいか否か、じゃないのよ。
あなたが悩む必要はないの」

拒否権はない、か…。
記憶の封印も、決定事項。
俺が決める事じゃない。
悩んでも、意味がない。
結局、何をしても意味がない…

「でも、早苗のためにそこまで悩めるあなたは、とても優しい人よ。
普通だったら、この状況でそこまで悩まない。
あなたなら、早苗を任せても問題ない…
私はそう思ってる。
…早苗は、あなたを信頼しているしね」

…信頼されている、か。
それでいいのか…？

「話はここまでよ。
…と、言いたかったんだけど、あなたに一つ言っておく事があるわ」

…？
まだ何かあるのか…？

「そんなに悩んでいたら、楽しめる事も楽しめない。
早苗のために悩むより、一緒に色々楽しんだ方がいいわ。
そっちの方が、早苗も楽しいし、あなたも楽しい。
そう思わない？」

「確かに、そうですね」
楽しんだ方がいい、か。
少し考えれば、簡単な事だったな。

「でしょ？
私の経験から言うと、あまり悩まない方が、色々上手くいくのよ」

ここでいくら悩んでも、結果が変わらないのなら、悩むだけ無駄。
むしろ悩めば悩むだけ、後の後悔が大きくなる。
それなら、悩まない方がいい。

……それでいいんだ。

「……
私の話は終わりよ。
あなたから何か言うことはある？」

「……何もない……

…いや、一つだけ。
早苗さんを悲しませないで下さい。早苗さんが悲しむ所なんて、見たくないから」

「大丈夫よ、私を信頼して。

でも、やっぱり…あなたは、本当に優しい子。
いや、それとも…
好きなのかしら？」

「へ？」

好き？

「どういうこと？」

「……

もう一度聞くわ。

早苗のこと、好きなの？」

「……

え？

え！？

えええぇぇぇぇぇぇぇぇ！？

ち、違う！違います！

そんなんじゃあないです！」

いきなり何を聞いてくるんだ紫さん！

違うから！

あなたの推測、間違ってる！

そんなんじゃない！

「……

まあいいわ。

…あ、後もう一つ」

「あれ、スルーされた！？
それにまた『もう一つ』！？
さっきも言っていたはず！」

紫さん、本当に違うからね！
そういう気持ちはないから！
誤解しないで！

「今思い出したの。

明日の朝、良い物が見られるかもよ。
言いたいのはそれだけ。
じゃあね～」

あ、帰った！
一方的に話終わらせて帰った！
絶対勘違いしてるよあのスキマ！

…にしても、『良い物』って……何なんだ？

まあ、いいか。
悩んでも仕方ない。
それより…

「さてと、寝るか…」

やっと、寝られるな…。
…今度は誰もこないよな？

Ｓｔａｇｅ２－３　退屈無き生活（後書き）

服や料理の描写がないのは、作者のそちら方面の知識不足が原因です。

恐らく服や料理の描写は小説中ではできないので、皆さんのイメージで補完をお願いします。

Ｓｔａｇｅ２－Ｐｈ　第１回Ｐｈａｎｔａｓｍラジオ（前書き）

今回は、本編の流れとは関係ない回となっています。

Ｓｔａｇｅ２－Ｐｈ　第１回Ｐｈａｎｔａｓｍラジオ

「どうも、作者です。
『いきなり何言ってんの？バカなの？』とか思っている読者さんもいるかと思いますが、ちょっとだけ作者の茶番につきあって貰えると幸いです。」

「ちょっと！！
このラジオの主役である私こと、八雲紫を忘れてない！？」

「主役？
主役は作者がやる役。
あなたは主役じゃない。
そういうこと。」

「わ、私が脇役なの！？
だってこのタイトル、『Ｐｈａｎｔａｓｍ』ってあるじゃない！
なのになんで！？」

「ああ、それ？なんとなく。」

「えぇー！？」

「それじゃ、色々と解説を入れていきます」

「まずは、オリキャラの解説ね。
……やっぱり私が主役で」
「ありません」
「ちっ…」
「『ちっ…』って……
解説いきますよ。
面倒なんで４人一緒に」

緑山（みどりやま）　風戸（かざと）

性別：男
職業：高校２年生
年齢：１７
外見：身長は一般的な高校男子レベル、
髪は黒く短い。
得意な事：ツッコミ
苦手な事：あんまりない（本人談）
東方Ｐｒｏｊｅｃｔプレイ経験：あり（Ｎｏｒｍａｌをぎりぎりク
リアできる程度の能力）
その他：この物語の主人公……
だと思う。
偉い人の前では丁寧に話すが、それ以外だとちょっと口が悪い。

森川（もりかわ）　速人（はやと）

性別：男
職業：高校２年生
年齢：１６
外見：身長は風戸より高い。
髪は茶色混じりの黒のショート。
それとメガネ。
得意な事：ゲーム全般
苦手な事：面倒事
東方Ｐｒｏｊｅｃｔプレイ経験：あり
（Ｌｕｎａｔｉｃをクリアできる程度の能力）
その他：風戸とは逆に、打ち解けていない人には敬語で話す。
ちなみに、マニアックな事を意外と知っているため、別名『困った時の森川さん』と呼ばれる。

天野（あまの）　流人（りゅうと）

性別：男
職業：高校２年生
年齢：１６
外見：身長はかなり低い。
髪は茶髪で、よく寝癖がある。
得意な事：どこでも寝る事
苦手な事：ずっと寝ないでいる事
東方Ｐｒｏｊｅｃｔプレイ経験：なし
その他：いつでもどこでも眠そうな顔をしている。
『気付いたら寝ていた』などの事がよくあるため、話をする人にとっては面倒なやつである。

学校の授業でも居眠りがよくあり、成績が危なくなってきている……と言った事はなく、平均的な成績を維持している。

白鳥（しらとり）　春海（はるみ）

性別：女
職業：高校２年生
年齢：１７
外見：身長は風戸より少し小さいくらい。
髪は黒く、肩の辺りまであるストレートヘア。
得意な事：気配を消す事
苦手な事：初対面の人と話す事
東方Ｐｒｏｊｅｃｔプレイ経験：なし
その他：初対面の人と話す時はおどおどしてしまうが、良く知っている人と話す時は楽しそうに喋る。（必要以上には喋らないが）

文が来た事に驚いているが、不安を感じながらもこの状況をポジティブに考えようとしている。

ちなみに学校での成績はかなり良いため、その点ではその他３人に頼りにされている。

「現時点で言えるのはこれくらいです。
書いていない事もあるのですが、全部はさすがに書けません。
それから、本編で説明されなかった事の補完をします」

Q. 季節は？

A. 夏休みスタートから4，5日過ぎた時、つまり夏真っ盛り。

Q. なぜ風戸は夜に訳もなく出歩いていたのか？

A. 紫に無意識の内に誘導されました。

Q. 高校生なのになぜアパート？

A. 彼らの通う高校が、『親からの自立』を義務づけ、支援しているため。
（訳：ご都合主義）

Q．魔理沙と小町と文も、早苗さんと同じ状況なのか？

A．同じような状況です。
魔理沙は速人のアパート、小町は流人のアパート、文は春海のアパートに住む事になりました。

「これで大体の設定は説明し終わりました……
多分。

最後になりますが、一つお詫びしなければならない事があります。
初めの設定では、
登場人物の『森川速人』が、
『森川翔』になっていました。

物語の途中、『速人』でなく『翔』としてしまった場所があり、訳がわからなかった人もいたと思います。
現在は修正が完了しているはずですが、修正がされていない場所、またはおかしな箇所を見つけられた場合、できればご一報お願いします。
今後はこのようなミスが無いよう努力します。

それでは、『第１回Ｐｈａｎｔａｓｍラジオ』

これにて終了です！
さようなら！」

「私、途中から何も言えてないわ……」

Ｓｔａｇｅ２－Ｐｈ　第１回Ｐｈａｎｔａｓｍラジオ（後書き）

『ラジオ』じゃない気がしないでもない。
次回からは本編に戻ります。

第２回は…
やるかもしれません。

質問はいつでも受け付けております。
（質問に答えられない場合もあります）

Ｓｔａｇｅ３－１　夢と現実の境界（前書き）

本文がひどくグダグダです。

多分今までで一番ひどいです。

Ｓｔａｇｅ３－１　夢と現実の境界

「……
まだ朝早いのに起きてしまった……」

まだ朝の６時半だ…
夏休みに早起きしてもあんまり意味がないのに…

……？
何かあったような……

「……あ！
早苗さんが家に…」

……あれ？
本当に、居るのか？
あれは、夢だったんじゃ？

「……
昨日片付けた荷物が、無い…」

夢、か……。

まあ、ありえない事なんだ、あんな事。
夢じゃない方がおかしい。

「……寝るか」

夢を引きずるなんて、馬鹿らしい。

「……」

また、起きてしまった。
寝ていたいのに……。

「どれくらい、寝たんだ……？」

何か、おかしな感じがする。

「……あれ？」

時計が、６時『１５分』を、示している。
自分の部屋に、荷物が『増えている』。

「さっきのは、夢なのか…？」

…それとも、これが夢か？

「こっちが現実。

さっきのは夢よ」

「……そっか」

妙に説得力がある言葉だ。
信じていい。そんな感じがする。

「あれ？
『さっきの夢』って…
何で知ってるんですか？
紫さん？」

「秘密よ」

即答された。
まあ大抵、能力使って夢の中を覗いたとか、そんな所だろう。

試しにほっぺたをつねってみた。
痛い。
夢じゃない……らしい。

「早苗も起きてるわよ。
……でも、何か勘違いしてるみたいね」

「勘違い？」

「『学校に遅れちゃまずい』
とか言ってたわね」

「……」

早苗さんは今日が学校がある日だと勘違いしている。

←

こちらは夏休みのため、紫さんが来なかったらまた寝ていたはずである。

←

いつまでも起きてこないのを不思議に思い、早苗さんが俺を起こしに来る。

←

多分早苗さんは優しく俺を起こす。

←

俺はそのくらいでは起きられない。

←

早苗さんは俺を起こすのに

『あの方法』を使う。

←

俺のほっぺたの痛さが有頂天。ヤバイ。

←

俺は、紫さんに助けられた。

ここまでの思考時間、０．３秒。

「紫さん、ありがとうございます！
この恩はいつか必ずお返しします！」

「……
何言ってるのかしら……

まあいいけどね…
早苗は朝ご飯作ってるわよ、あなたも手伝ってあげて」

「あ、はい！」

何か紫さんが引いている気がしたけど、気にしないことにしよう。
紫さんは恩人なのだ。
恩人の頼みは聞かなければいけないのである。

「後、早苗の頼みは、出来るだけ聞いてあげてね」

「はい！わかりました！」

まあ、『出来るだけ』だけど…

「それじゃ、早苗の手伝いお願いね。

それと、分かってるとは思うけど……」

……何が？

「ちゃんと着替えてから部屋を出なさいよ。

あなた、いつもは家を出る前に着替えてたでしょう？

女の子の前で、そんなんじゃ駄目よ」

「あ…

た、確かに…」

危ない所だった。

「何度もありがとうございます、紫さん」

ずいぶんと紫さんに助けられてるな…

……ん？

何か、今の会話がおかしかった気がする……

『あなた、いつもは家を出る前に着替えてたでしょう？』

……

「あれ？
何で、いつもの生活知ってるんですか？」

「ああ、それね…
この数日間、あなたの生活を見てたのよ。
早苗を任せられるか、確かめにね」

……
どこまで見られてたかは、考えない事にしよう……

「……それじゃあ、着替えますんで」

「……で、何？」

「……？
いや、『何？』じゃなくて、
着替えるので部屋出て下さい」

少し考えればわかる事じゃあ…

「……見ちゃ駄目？」

……

「出てって下さい」

『見ちゃ駄目？』って……

駄目だろ。

「つまんないわねぇ。
じゃあ、さよなら～」

やっと出ていった……

少年着替え中……

「さて、行きますか」

着替えの途中に視線を感じた気がするが、気のせいだろう。

……気のせいだよね？

……考えない事にしよう。

ガチャリ

「風戸さーん！起きて下さい！
朝ですよ！」

……

「え？
おいいいいいいいい！？」

何で人の部屋にいきなり入って来てるの！？
さっきまで俺着替えてたんですが！？

「？
どうしたんですか？」

いやいやいやいや！

『どうしたんですか？』じゃないって！
もしかして、幻想郷の人達ってみんなこんな感じなの！？

「そんな事より、学校に遅れちゃいますよ！
早く行かないと！」

「ああ、えーっと…
今、夏休みなんだけど…」

言いたい事はたくさんあるが、まあ……後で言おう。

「夏休み？
つまり、今日は学校に行かなくていい、と言う事ですか？」

「今日と言うより、後1か月位学校はないぞ。
と言っても、たまに勉強しに行くけど」

「そうなんですか…
ごめんなさい、まだ寝たかったですか？」

「いや、別にいいって。
嫌な夢も見ちゃったしな……」
あんな夢、見たくなかった……

「夢？」

「あ……えーっと……

朝起きたら、早苗さんがいなくなってたって夢だったんだけど…」

「……大丈夫ですよ。
私はここにいます。
突然いなくなったりなんてしませんよ。
だから、大丈夫です」

別に、そこまでではないんだけどな…

「だから、そんなに悲しそうな顔しないで下さい。

……ほら、朝ご飯食べて、元気出しましょう」

…え？

俺、そんなに悲しそうな顔してたのか？

まあ……いいかな。
気にしてもしょうがない。
悲しかったのは、事実だしな。

「今日の朝ご飯は、自信あるんですよ！
ほら、早く早く！
冷めちゃいますよ！」

「あ、ああ…」

少年少女移動中……

「いただきます」

早速食べてみよう。

……既に見た目が凄いけど。

これでおいしくなかったら、もはや詐欺のレベルだ…

「……これはっ！！
甘すぎずしょっぱすぎずの味加減、
見栄えも良い、
そして何より、素材の美味しさを限界まで引き出して…」

「……あの、普通に感想言って下さい」

「あ、美味しいよ、凄く」

ノリでやった。
後悔も反省もしていない。

「あはは……
風戸さん、おかしくなったのかと思いましたよ…」

「大丈夫大丈夫、良くあることだから」

「え？
風戸さんはおかしな人なんですか？」

「……
いや、違うから。
おかしな人なんかじゃないから」

早苗さんは、勘違いをしやすいようだ。

……にしても、『おかしな人』って呼ばれるのは、ちょっとショ

ックだ…

「それで、これからどうするんですか？」

これから……か。

「早苗さんのしたい事をすれば、良いんじゃないかな」

「でも、風戸さんの都合とかは大丈夫なんですか…？
迷惑をかける訳には……」

「大丈夫。
早苗さんの頼みなら聞くからさ。

…と言っても、俺の力を越えない頼みなら、だけど」

「…いいんですか？
せっかくの夏休みなんでしょう？
私なんかのために…」

「……『私なんか』なんて言わない。
昨日、俺も言われたけどな」

「…そうでしたね。
……じゃあ、色々頼み事するかもしれませんが、よろしくお願いします。

……でも、風戸さんの頼みは、私が聞きます。
私に出来る事なら、どんどん頼んで下さい！」

頼み事……
あ、１つあった。

「早苗さん、早速１つ頼み事をしてもいいかな？」

「え？いいですけど…」

「ほっぺた伸ばすのは勘弁して下さい！」
「嫌です！」

……即答である。

「ほら、今日もほっぺたを……」

ちょっ！
早速かっ！
やばいっ！
早苗さん、目がなんかやばいよ！
「ふふふ……」
！？
『ふふふ……』って言う人だったっけ早苗さん！？
やばいやばい！
これはやばいぃぃ！

「捕まえましたよ…
さあ、おとなしくほっぺたを伸ばさせて…」

……あれ？
いつ捕まえられたの俺？
何か、一瞬で全てが終わった気が…
「待った待った早苗さん！
正気にもどって！」
何とかして早苗さんを止めないと…
「ほら、気持ちいいですから……」

話、聞いてないな。

……諦めよう。

もう無理だ…

Ｓｔａｇｅ３－１　夢と現実の境界（後書き）

物語を大きく動かせる想像力がほしい今日この頃。

Ｓｔａｇｅ３－２　一難去って……？

「本当にごめんなさい！」

……

早苗さんが元に戻った。

『我慢できなくなったんです。』

早苗さんはこう言った。

……これ、どうしよう？

うーん……

……

……

「ちょっと外に行ってくるから、家の中に居てくれ」

何だか、このまま早苗さんと居ると、空気が悪くなるだけな気がする。

そんな気がした。

…気分転換して考えよう。

…考えても仕方ない、なんて気がするのは気のせいだろう。

「外に出てみたけど…」

まだ朝早くで、人が見当たらない。

…ん？

「あやや、こんな早くに起きているとは…」

「文さん？」

すぐ横に、文さんがいた。

文さんの服が普通の洋服に変わっていて、文さんだと気付くまでに

ちょっと時間がかかった。
服が変わると、印象が結構違うな……。

「なるほどなるほど。
それで家出してここにいる、と」

「いや、家出じゃないです」

とりあえず、朝起きてからあった事を文さんに話してみた。

何だかおかしな反応が返って来たが。

「と、そんな事より。
いい物が有るんですよ。
ちょっとこちらに……」

……『いい物』？
一体何なんだ？
文さんが歩いていった方について行くと、人気のない場所に着いた。

「それで、『いい物』って一体……？」

「これです、これ」

そう言って文さんが出したのは、デジカメだった。

「『でじたるカメラ』と言う物らしいのですが、これは凄い物ですね！紫さんに貸してもらったんですよ！

……あ、話が脱線しましたね。
実は、この中には……
みなさんの写真が入っているんですよ…」

「……」

文さん、それのどこが『いい物』なんだ？
普通の写真でしょ？
わざわざ声をひそめて言う事じゃあない気が……

「実は、昨日みなさんで集まった後に、写真を撮りに行ったんですよ」

……ん？

「いやぁ、音を立てずに写真を撮れるなんて、本当に便利な機械ですね、これ」

おい、まさか……

「そのお陰で、いつもは撮れないような写真まで撮れましたよ。見ます？」

「うーん…
ちょっと見てみたいな……」

あ、本音が出てしまった。

まあ、いいか。
どうせこの２人以外誰も聞いてないし。

「どうぞどうぞ。
我ながら、なかなか良く撮れてると思ってますよ……

……あれ？
カメラが……無い！？」

…カメラが無い？

「……無い！
本当に無い！！」

「ええっ！？
さっきまで手にありましたよね！？」

どうやら、本当にカメラがなくなったらしい。

一体どうして…

「あ、あの中には……
私の大切な写真があるのに……」

「へぇ……
どんな写真が入ってるの……？」

「そりゃあもう、可愛いのから、アレなのまで……

……へ？」

……あれ？
俺、喋ってないよ？
一体誰が？

「そうなんだぁ……

ねぇ……そんな事より……
話は全部聞いたよ。
文、ちょっと話しようか？」

あ、あれ……

春海！？
どうしてここに！？

「あ、ややや……
春海さん、どうかお許しを……」

文さん、表情がおかしくなってるよ！
蛇に睨まれた蛙のような顔だよ！

「何言ってるの？
許さないとは一言も言ってないよ。
『話し終わったら』ちゃんと許すよ、当然」

それは、許されてると言えるのか！？

…そんな事より、ここにいたら俺まで巻き込まれそうだ……

逃げよう。
足音を立てずに、ゆっくり離れて……

「……後、逃げたらもっと大変なことになるからね」

訂正。
既に俺も、巻き込まれていたようだ……
「ほら、私の部屋で話しましょう？」
……怖い。
本当に怖い。

少女説教中……

「……
文さん、大丈夫……？」
「何とか……」

軽く３０分説教が続いた気がする……
文さん、かなり疲れた顔してるな……

自業自得だから、しょうがないと言えばしょうがないんだけど。

「はぁ……
写真は全て消されて、光学迷彩バッジも取られ……
おまけにお説教まで……」

「はは……

春海があんなに怒るなんて、何年ぶりだったかな……」

「？
もしかして、お二人は……
幼なじみ、とか言う関係なんですか？」

「まあ、そんな関係ですけど……
それが何か？」

「いやいや。
別に何でもないですよ」

文さん、顔に出てますよ？
明らかに『良いネタになりそうです！』って顔になってますよね？

「ちょっと詳しく聞くだけですよ」

「それ、何でもないとは言わないと思います。
後、聞かれても話しませんよ」

「……
なら仕方ないですね、この話は終わりにしましょう」

……？
結構あっさり引き下がったな……
まあ、しつこく聞かれるよりましか。

「それじゃあ、俺は戻ります」

「話す気になったら、いつでも話して下さいよ！」

「まあ、話す気になったら、ね…」

無いとは思うが。

少年移動中……

「早苗さん、ただいま……」
ちょっと外に出て来るなんていいながら、だいぶ長くなっちゃったな……。
早苗さん、怒ってないかな……？
「あ……早苗さん。
えっと……」
「「ごめんなさい！
……へ？」」
えっと……
これは、どういう事？
「……ごめんなさい！
私があんな事して……
怒ってますよね……
……本当に、ごめんなさい！」
「……気にする事ないって。
俺も、早苗さんを心配させちゃって……ごめん。
俺は別に、怒ってないよ……
早苗さんが謝る必要はないって。

……むしろ、謝るべきなのは、こっちの方だよ。
早苗さん、ごめんなさい」

「……本当に、怒ってないんですか？」

「本当だよ。
怒ってない、もう気にしてないから、な？」

「……でも、
心配、したんですよ……」

早苗さん、俺の事を心配してくれてたのか……

「早苗さん、心配してくれてありがとう。
これからは、なるべく心配掛けないようにするからさ」

「……約束ですよ？」

「ああ、約束する」

「それで、今日の予定なんだけど……
どこか、行きたい所はある、早苗さん？」

「行きたい所……

あ！
私、風戸さんのお友達さんとも色々お話してみたいです！」
まあ確かに、仲良くなって悪い事はないだろうし……

「わかった、じゃあメールしてみるから、ちょっと待ってて。

あ。
早苗さん、そう言えば……」
「？

何ですか？」

「その髪の色、変えとかないと……」

「あ、そうでしたね……
じゃあ、変えてきますね」

「あ、ちょっと待って！
もし何かあったら大変だから、先に俺があの薬試すよ」

俺にちょっとトラブルがあっても、早苗さんに何か起こるよりは良いからな。

少年実験中…

「うっわ……
凄いなこの薬」

まさか、髪につけてすぐに髪の色が変わるとは……
しかも、戻るのも一瞬だし……

「早苗さん、どうやらあの薬は大丈夫らしいから、髪の色変えてきたら？」

「そうですね、そうします」

少女髪染中…

「どうですか、風戸さん？
似合ってます？この黒髪」

「……
あ、ああ！
凄く似合ってるよ！」

一瞬、言葉が出て来なかった……
凄く、可愛いな……

「これで、出かけられますね」

「そ、そうだな……

お、メールだ。
なになに……
はぁ？」

「何て書いてあったんですか？」

「速人から、『助けてほしい』ってメールが来たんだが……
行ってみるか」

「えぇ！？
それ、大変な事になってるんじゃあ……」

「ああ、心配しなくていいよ。
いつもの事だから」
「いつもの事なんですか！？」
まあ、いつもの事だから仕方がない。

「じゃあ行くよ、早苗さん」
「速人さん、本当に大丈夫なんですか……」
「大丈夫だよ（多分）」
さて、今回は何があったんだ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6279w/

東方現想境～Fantasy Wind.

2011年12月11日07時48分発行